

2012 年度 小委員会活動成果報告

(2013 年 2 月 13 日作成)

小委員会名	ヒューマナイズングの実践小委員会		主 査 名: 讚井純一郎 就任年月: 2009 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (環境心理生理運営委員会)		委員長名: 佐土原 聡 主 査 名: 松原齋樹
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2013 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	①ヒューマナイズングの実践状況に関する情報を整理する。(2009～2012 年度) ②実践を前提に、ヒューマナイズング研究の研究手法、研究対象の拡張可能性検討。 (2009～2012 年度) ③シンポジウム、チュートリアル開催。(2009～2012 年度) ④報告書のとりまとめ、刊行物の企画。(2009～2012年度)		
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無: 有		
	主査: 讚井純一郎 (関東学院大学) 幹事: 小島隆矢 (早稲田大学) 委員: 宇治川正人 (竹中工務店)、成田一郎、丸山玄 (大成建設)、山田哲弥 (清水建設)、伊丹弘美 (早稲田大学)、大井尚行 (九州大学)、平沢隆之 (東京大学)、古賀誉章 (東京大学)、有川智 (東北工業大学)、植木暁司 (国土交通省)、小野久美子 (国土交通省)、佐藤隆 (JR東日本)、小代禎彦 (TOTO)		
設置 WG (WG 名: 目的)			
2011 年度予算	53,000 円	ホームページ公開の有無: 無 委員会 HP アドレス:	

項 目	自己評価
委員会開催数	2 回 (3 月実施予定1回を含む)
刊行物 (シンポジウム資料除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1. 2013 年度に企画刊行小委員会に移り、ヒューマナイズングの研究手法を刊行物としてまとめることを前提に、今年度は、刊行計画の立案、準備を中心に活動する予定であったが、運営委員会との調整の結果、刊行委員会への移行は、①「持続性社会の環境心理小委員会」(2013～2017 年)、②「環境心理研究手法 WG」(環境心理小委員会の WG) (2013～15 年)にて、さらなる検討を実施した上ということになり、結果的に、今年度の活動は低調なものとなってしまった。
委員会活動の問題点・課題	1. 主査、幹事ともに本務が多忙で委員会開催が滞った。早い段階で主査の交代等の対応をとるべきであった。

- * 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。
- * 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学本委員会用 自己評価欄

2012 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>2006年から09年までの4年間、当小委員会の前身であるヒューマナイズ小委員会では、公共空間における「おもてなし感」を中心に、人間中心の環境創造のあり方を検討してきた。2010年から13年までの4年間では、これまでの活動成果をベースに、ヒューマナイズという考え方、方法論を、実践という側面から再検討し、その一層の拡大と定着をはかるための方策を検討していくことを念頭に、以下の目標を掲げた。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ヒューマナイズの実践状況に関する情報を整理する。 ② 実践を前提にヒューマナイズ研究の研究手法、研究対象の拡張可能性検討。 ③ シンポジウム、チュートリアルを開催。 ④ 報告書のとりまとめ、刊行物の企画。 <p>このうち①については、2009年、2010年の大会でのOS「環境心理研究の実践」の企画・実施、株TOTO ユニバーサルデザイン研究所訪問・意見交換、さらには多方面からのゲストスピーカーを招いての勉強会を通じ、ヒューマナイズの実践状況に関する知見を得ることができた。</p> <p>②については、以下のゲストスピーカーや委員による研究発表・勉強会を実施した。</p> <p>「行動分析ベースの交通空間設計の成功・失敗談」 平沢隆之氏(東京大学) 「地球環境心理学」について 宇治川委員(竹中工務店) 「行為を軸とした建築環境の評価」東京都市大学 小林茂雄氏(東京都市大学) 「感情労働と環境」 宇治川委員 「エコロジカルなライフスタイル」 宇治川委員 「公共施設の価値と評価に関する研究」 小野委員(国土交通省) 「エコ行動に関する調査(フィージビリティ・スタディ)」 小野委員</p> <p>③については、上記OS「環境心理研究の実践」と対応する形で、環境心理小委員会と共催で『環境心理ワークショップ:環境心理研究の実践の実際』を開催した。(2009年)</p> <p>④については、主査幹事の本務多忙、また環境心理生理運営委員会の組織変更などの理由から、作業は停滞している。委員の多数が新組織に移行することから、2013年度以降、新組織においてとりまとめ作業を発展継続し、刊行につなげていきたい。</p> <p>以上を総合的に判断し、達成度は70%と評価する。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価:小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価:小委員会設置目標に対し、70%から80%の達成度
 - C 評価:小委員会設置目標に対し、60%から70%の達成度
 - D 評価:小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者の評価・外部評価(シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など)に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。